

光の中で目をこらす

小高知子

登場人物

〈1〉男1

女

男2 不動産会社勤務。

〈2〉少女1 小学五年生。

少女2 小学三年生。

〈3〉男A

男B

男C

男D

〈4〉姉

妹

※登場人物はみな関西弁らしき言葉で話すが、上演においてはこの限りでない。

〈1〉

ここはアパートの一室。  
時代に遅れた造りである。  
奥には簡素なキッチン、その先に玄関が続いている。

なにもない部屋に女と男2。

男2、部屋の見取り図などの書類が入ったファイルを抱えている。

男2、女に自分の携帯電話をさし出す。

女、受け取らず、男2に背をむけてすこし離れる。

男2、女の前に回り込み、携帯電話をさし出す。

女、逃げる。

男2、追いかける。

女、ふいに立ち止まり、

女 行ったことある？

男2 え。

女 教会。

男2 教会？

女 うん。

男2 ない、かなあ。

女 あたしもない。

男2 あ、そう。

女 行ってみたくない。

男2 うーん、

女 なあ。

男2 どうやら。

女 あたしは行ってみたい。

男2 悔い改めるの。

女 (男2を睨む)

男2 ごめん。

女 なんて謝るねん。

男2 ごめん。  
女 しょうもな。  
男2 なんだ。  
女 え、  
男2 なんて教会。  
女 だってなんか良さげやん。天井高くて、日がさしてて、でも  
ひんやり静かで。  
男2 教会じゃなくてもそんな場所いっぱいあるやろ。  
女 そうかな。  
男2 あるよ。  
女 そこだな、  
男2 うん。  
女 じっと目をこらす。息を殺して。ただ立って、  
男2 祈るってこと？  
女 じっと、じーっと、  
男2 こらすの、  
女 え。  
男2 目はこらすの。つむるんじゃなくて。  
女 そうやで。  
男2 教会でお祈りっていったらさあ、  
女 うん。  
男2 (両手を組んで目をつむり) 普通こうじゃないの。  
女 目とじたらあかんよ。  
男2 なんだ。  
女 見えへんやん、自分のことしか。  
男2 ああ、  
女 適当に返事すんな。  
男2 (笑う)  
女 笑ってごまかすな。  
男2 なに見たらいいの。じゃあ。  
女 まっすぐ。  
男2 うん、いやだから、その見るものはなんなん。

女 なにもないかしらん。  
男2 えー。  
女 でもとにかく前。  
男2 なにそれ。  
女 潜るみたいな。  
男2 目あけたまんま？  
女 もちろん。  
男2 あとで痛くなるやつやな。  
女 挑むみたいな。  
男2 うん、  
女 とじたらあかんで、とじたら。  
男2 目乾くやん。  
女 痛いけど。怖いけど。とじたらあかん。とじたら、これまで  
見た景色に騙されてしまう。  
男2 どういうこと。  
女 それが今目の前にあるって思ってしまう。ほんまは昔に見た  
ことがあるだけやのに。  
男2 うん、  
男2、女にならって目の前の一点をじっと見る。  
しばし間。  
男2 え、なにこれ。なにかを、こう、探したらいいの。  
女 じっと。じーっと。ただ、目をこらす。  
男2、女につき合ってじっとしている。  
男2 なに見えるの。  
女 似てる気がする。  
男2 え、  
女 それって考えるのと似てる気がする。  
男2 考える、

女 なにがしたいのか。どうしたいのか。なにが心地よくてなにがうっとうしいのか。

男2 うん。

女 でも毎回見えるわけじゃないねんな。

男2 へえ。

女 長い時間は見てられへんし。

男2 うん。

女 誰かにおなじものは見せてあげられへんし。

男2 うん、

男2、手もとの携帯電話を見ている。

女 同じ場所と一緒に潜つても、あたしが見たのとおなじもんは、

男2 うん。

女 見せてあげられへんねんなあ。

男2 あのさあ、

女 うん。

男2 ちよつと、もうちよつと純度下げて話してくれる。

女 どういうこと。

男2 もうすこし雑味がないと話が入ってこないわ、これ。

女 なにそれ。

男2 ごめん。

女 しょうもな。

男2 うん。

あとが続かず、なんとなく間。

男2 俺出とくで。

女 え。

男2 任せといて。絶対聞いたりせえへんから。

女 なにが。

男2 任せといて。引き止めといたる、あいつ、戻ってきたら。

女 うん。

男2 ほんでこれ会社から支給されたやつやから、もしむこうに番号控えられても問題ないし。

女 うん。

男2 もし電話かかってきてもまちがえましたとか、いくらでも誤魔化せるし。

女 (笑って) うん。

男2 なに、

女 何回同じこと言うねん。

男2 いや。

女 ごめんな。

男2 え、

女 ごめん。

男2 うん。

女 ありがとう。

男2、女に携帯電話を渡す。

女、それを受け取る。

男2 じゃ、

女 うん。

男2 ごゆっくり。

男2、部屋を出ようとする。

女 待つて。

男2 なに。

女 かけ方が分からへん。

男2 え。ああ、

女 ごめん。

男、女のそばに戻って、

男2 まず、番号を押す。  
女 市外局番から？  
男2 市外局番から。

女、携帯電話を操作する。

男2 で、このボタン、受話器があがつてる方押すと、発信。  
女 うん。  
男2 てか書いてあるから。ここ。発信。  
女 うん。  
男2 切りたいときはこっち、受話器おりてるマーク。  
女 分かった。  
男2 ばばあか。  
女 え、  
男2 知ってるやる、これくらい。  
女 うん。  
男2 じゃ、出とくから。  
女 あ。  
男2 なに。  
女 消えてる。画面。  
男2 しばらく触らんとくとそうなるねん。  
女 にしても早くない、  
男2 古い機種やからかな。  
女 せっかく打ったのに。  
男2 番号入れたらすぐ発信しな。  
女 すぐ、  
男2 すぐ。  
女 なあ、  
男2 なに。  
女 繋がるまで見ててくれへん。  
男2 なんやねん、それ。

女 あかん？  
男2 いいけど。

女、ふたたび携帯電話に番号を打ち込む。

女 で、発信。  
男2 そう。

女、ボタンを押す。

男2 だからそれ、切るときに押すんやって。  
女 うん。  
男2 (ちよつと笑ってしまつて) お前なあ、  
女 (つられて笑つて) うん。  
男2 なんやねん、ほんま。  
女 ごめん。  
男2 なに。どうしたいの。  
女 最初、  
男2 え。  
女 なんて言つたらいいと思う。  
男2 もしもしじゃないの、普通に。  
女 それから？  
男2 それから？ それから、あたしよママよつて。  
女 あたしおかあさんつて呼ばせてんねん。  
男2 どっちでもいいけど。  
女 うん。え、で、  
男2 で？  
女 それから、  
男2 それから？ それから、元気、風邪ひいたりしてないつて。  
女 なるほどね。まずは体調をおうかがいね。  
男2 はじめに聞いとくもんやる。  
女 いいと思う。で、

男2 で。ママは元気よって。  
女 だからあたしおかあさんやねんて。  
男2 そこは適宜変換してや。  
女 おっけー。ほんで、  
男2 待って、  
女 なに。  
男2 誰が電話すんねん。  
女 ああ、  
男2 なに。  
女 バレた。  
男2 バレるわ。  
女 ここから先が大事やのに。  
男2 だから自分で考えな。  
女 あたし口下手やねん。  
男2 べつにうまいこと話す必要ないやろ。  
女 でも、  
男2 自分の娘やん。  
女 だって、  
男2 なんやねん。  
女 怖いもん。  
男2 自分の娘やろって。  
女 だから怖いんやん。  
男2 え。  
女 娘やから怖いねん。女どうしやから。  
男2 そういうもん？  
女 そういうもん。  
男2 ああ、そう。  
女 うん。  
男2 いくつ、今。  
女 小学五年。  
男2 もう？  
女 もう。

男2 早いなー。  
女 うまれてから十一年。  
男2 そんなになんのか。  
女 うまれて十一年目の立派な女よ、もう。  
男2 へえ。  
女 ブラジャーしてんねん。  
男2 え、  
女 子ども用のやけど。  
男2 早くない、  
女 早いよ。  
男2 今の子ってそうなん。  
女 あたし自分が十一歳やったころと照らし合わせてさあ、  
男2 うん。  
女 そのころ考えてたこととか、それから経験したいろんなこととか思い出してさあ、  
男2 うん。  
女 そしたらもう、なんていうの、もう、  
男2 うん、  
女 途方もないな。  
男2 なにそれ。  
女 途方もないわ。  
男2 あれやな、  
女 え。  
男2 やっぱ女の子の方が成長早いんやろうな。心もからだも。  
女 そうかもね。  
男2 そんな気がする。  
女 ぞっとするくらい女。  
男2 へえ。  
女 ぎよつとするくらい子ども。  
男2 ふうん。  
女 いっちよまえにブラジャーなんかしてるのにな、  
男2 うん。

女 肩のラインとかな、めっちゃ細い。  
男2 へえ、  
女 でもばんばん。すごいばんばん。細胞そのものがばんばん。  
男2 どういうこと。  
女 贅肉じゃないねん。  
男2 ああ、  
女 お酒とか油とかそういうのとは無縁の、ふくらみ。分かる？  
男2 十一歳なんやろ、当たり前やん。  
女 近づくとか乳くさいねん、微妙に。  
男2 へえ。  
女 それやのにブラジャーしてんねん。ワイヤー入ってない、白のちっちゃーいの。  
男2 待って、  
女 なに。  
男2 プライバシー、  
女 なにそれ、  
男2 こんなおかん嫌や。  
女 なんです。  
男2 嫌やろ、知らんところで知らんおっさんに下着の色バラされんの。  
女 そうかなあ。  
男2 嫌やって、絶対。  
女 こんな母親をもったさだめや。  
男2 最低。  
女 仕方ない。諦めてもらおう。  
男2 グレるわ。  
女 え、  
男2 俺やったら。  
女 グレるかな。  
男2 知らんけど、  
女 グレるわな。  
男2 俺やったらな。

女 だって母親男と一緒に逃げてんで、  
男2 うん、  
女 グレるわ。それは。  
男2 (こたえない)  
女 でも愛してる。  
男2 (こたえない)  
女 濃い愛で、あの子のことを思ってる。  
男2 濃い愛、  
女 うん。  
男2 深い愛、じゃなくて。  
女 うん。あたしの愛は深くない。  
男2 へえ、  
女 でも濃い。深くない分、濃い。  
しばし間。  
男2 出てるから、俺。  
女 うん、  
男2 たばこでも吸ってるし。  
女 うん。  
男2 呼んで。終わったら。  
女 ちよっと、  
男2 え。  
女 繋がるまで見てって。  
男2 ああ、  
女 うん。  
女、携帯電話を操作する。  
男2 発信。  
女 うん、  
男2 こっちな。書いてあるから。ここ。発信。

女 うん。

女、ボタンを押そうとすると、

男1、やってくる。

男1 ごめんごめん。

男2 ああ、

男1 お待たせしました。

男2 ちよつと遠かったやろ。すぐ分かった、

男1 分かった分かった。ギリギリやつたけど。

女、携帯電話を隠す。

女 ギリギリアウト？

男1 セーフ。ギリギリセーフじゃ。

男2 よかったな、間に合つて。

女 いいとしてお漏らしはさすがに、

男1 ほんまに。急にきたわ。

男2 冷えるからな、家具とかなんも置いてないよ。

男1 あ、はじめてる？

女 あほか。待ってたんやで、ずっと。

男1 そっか。ごめん。(男2に) じゃ、お願いします。

男2 ああ、うん。

男2、ファイルから書類を出して男1と女に手渡し、

男2 間取り、一応これな。

男1 ありがと。

男2 まあ説明ってほど説明することもないんやけど、

男1 狭いからな。

女 言わんでいいねん、いちいち。

男2 見ての通り、そっちの台所と、この部屋。トイレは台所の

そっち側な。

女 (男1に) トイレ見てきたら、小便小僧君。

男1 うるさいわ。

男2 あかんで、水流れへんねんから。したいんやつたらまたコ

ンビニ行つてや。

男1 分かつてるつて。ほんで別にしたくないし。

男2 その窓、洗濯物ちよつとなら干せるみたいやけど、ほん

まにちつちやいもんだけやな。

男1 下着とか、

男2 白いちつちやーいブラジャーとかな。

女 (笑う)

男1 え、なににな。

男2 いや、ごめん。一応屋上に物干し竿いっぱいあるわ。

女 共用？

男2 そうやねん。だからまあほとんどコインランドリーなるか

な。あとで案内するわ、近くにあるから。

男1 あ、ついでに銭湯の場所も教えて。

男2 うん。あ、ほんでこの家コンセント少なくて、

女 ああ。

男2 テレビ置くとしたらここ。

男1 てことは、ここにテーブル低いの置いて、こうか。

男1、家具の配置をイメージして、くつろぐ真似をする。

男2 うん、たぶん。そんなかんじ。

女 なあ、

男1 え。

女 あれ、あんたのこのさあ、ローテーブル、

男1 あれはちやぶ台やろ、あれは。

女 なんでもいいけど。ここ置いたらめっちゃ狭くならへん。

男2 あ、メジャー持つてるで。大きさどのくらい。

男1 (腕を広げて) これくらい。



女 測ってきたんじゃないの。

男1 (腕を広げて) だからこれくらい。

男2 さっきと大きき変わってない。

女 箆置くとしたらここやんなあ。

男2 そうやねえ。

女 (男1に) あれ置ける? てか、玄関通るかなあ。

男1 あの箆はなあ、(腕を広げて) これくらいやな。(肩あたりを指して) ほんで高さはこれくらい。

女 だからなんで測ってけえへんの。

男1 (腕を広げ肩のあたりを指し) だからこれくらい。

男2 じゃあ、とりあえず玄関の幅と、この壁のこつからこつまで測つといたら。ほんで家帰って比べて。

男1 そつか。

女 ごめん、ありがとう。

男1 (女に) どう。

男2、男1にメジャーを渡し、女にペンを渡す。

女 え、

男1 だから、どう、これ。

女 なにがよ。

男1 やっぱあれ置くにはちよつと狭いか。(男2に) なあ。

男2 俺は分からへんよ。

男1 なあ、

女 いや、だから分からんって言ってるやん。

男1 ごめんな。

男2 えっ、

男1 ごめん、久しぶりやのに。なんかこんなことに巻き込んで。

男2 なに急に。

男1 急に思ってるん。

男2 あ、そう。

男1 うん。

男2 仕事やから。

男1 え。

男1 なんやねん。

男2 審査甘いのはここがダントツやから。

男1 審査、

男2 うん、審査。あるから。

女 入居の。

男2 そう。

男1 ああ、

男2 うん。

男1 そうか。

男2 うん。

あとが続かず、なんとなく間。

一同、見るともなしに部屋の中を眺めている。

男1、座卓を見立てて座り、たばこをふかす真似をして、

男2 仕事、やからなあ、これが。  
男1 そっか。  
男2 うん。  
男1 そうやったな。  
男2 うん。  
男1 (女に) はい、お前も。  
女 え、  
男1 お前も、座って、こう。な。  
女 嫌や、あたしせえへんで。  
男1 あほか。こういうのは実際に家具運び入れる前にちゃんとイメージしていた方がいいんやで。(男2に) なあ。  
男2 まあ、  
女 でもなんもないところでこんな人おらんって。(男2に) なあ。  
男1 いや、おるって絶対。(男2に) なあ。  
男2 うん、いや、意外とおるで。  
女 まじで。  
男1 ほら。  
女 こんな、ごっこみたいな？  
男2 ごっこっていうか、うん。  
女 そういうときどうしてんの。  
男2 なるべく見ないように。  
女 へえ。  
男1 礼儀として？  
男2 まあ、そうかな。  
女 ちゃんとしてるんやな。  
男2 見たくないしな。  
男1 あーはじまるねんなあ、新しい生活。(女に) なあ。  
女 なんなん、それさつきから。  
男1 古い生活を捨てて。  
女 まあ、そうやなあ、  
男1 新しい、希望に満ちた生活。  
女 それは、どうやろ。  
男1 (男2に) なあ。  
男2 え。  
男1 新しくて、希望に満ちてるやろ。  
男2 そうやなあ。  
男1 いっぱい見てきたやろ、こういう客、いっぱい。  
男2 うん、  
男1 それが仕事か。  
男2 まあ、  
男1 いいなあ。  
男2 どうやろ。  
男1 いいよ。  
男2 そうか。  
男1 うん。  
男2 行く？ そろそろ。  
女 うん。  
男2 店戻って契約書かなあかんしな。  
男1 えー、  
女 なに。  
男1 もう契約書？  
男2 だって手続きいっぱい残ってんで。  
男1 もう手続き？  
女 ここに決めるやろ。  
男1 それは、うん。  
女 じゃあさつきとした方がいいやん。  
男1 そうやけどさ、  
女 なによ。  
男1 だから、こういうのって、ちゃんとイメージ持ったかなあかんねん。実際に家具運び入れる前に。  
女 寸法測ったやん。  
男1 あほか、こういうのはな、数値では分からん、なんか微妙なあれがあるんやで。

女 なにそれ。

男1 そういうもんやねん。

女 ふうん。じゃあ気が済むまでここおったら。

男1 お前は、

女 あたしもう飽きたもん。(男2に) 屋上見てきていい？

男2 ああ、物干し場。いいよ。

女 それからあたし近所散歩したい。

男2 ああ、一回歩いてみた方がいいかもな。

女 さっきのコンビニで合流しよう。こいつの気が済んだら迎えにきて。

男2 うん。

女 じゃ。

女、行ってしまおう。

しばし間。

男2、壁をさして、

男2 そこ。

男1 え、

男2 分かる？ そこだけ色ちがうねん、微妙に。

男1 えー、

男2 言われな気づかへんよな。

男1 俺、言われても分からへん。

男2 前の住人がさあ、

男1 うん。

男2 ボヤ起こして。

男1 ああ、

男2 焦げてんて。

男1 大丈夫なん、それ。

男2 燃えたんは表面だけで、中の方は大丈夫やって。言ってた

男1 わ、業者の人がへえ。

男2 お前からさあ、

男1 え、

男2 お前から連絡きて、急に。話聞いて、

男1 うん。

男2 すぐこの物件思い浮かんで、ああ、でもでっかい焦げあつ

たなつて思い出して、それから早く、

男1 うん。

男2 なるべく早く、一日でも早く、ここが、お前らの安心できる場所になるように。お前らが避難できる場所になるようにつて、

男1 うん。

男2 俺はお前らの親かって、なあ。

男1 (笑って) そうやな。

男2 これが、こういうのが俺の仕事やけど、それだけじゃない。

男1 うん。

男2 新しくなくても。希望に満ちてなくても。俺は、

男1 うん。

男2 あいつさあ、

男1 え、

男2 俺絶対分かんと思つてん、これ。このちがひ。めっちゃ

きれいに隠せたつて。でも、あいつな、

男1 気づいたん？

男2 いや、気づいてない、と思う。でも、この部屋入つて真つ

先にあの壁にむかつていった。

男1 へえ。

男2 あいつたまにめっちゃ勘いいときない？

男1 ある。あれ昔からやな。

男2 なんなんやろうな。怖いわ、あれ。

男1 うん。え、ほんで？

男2 ほんでつて、

男1 あいつなんか言つてたん。

男2 いや、なんも。ただ見てた。

男1 見た。  
男2 うん。ずっと。  
男1 ずっと？ 俺が来るまで？  
男2 うん。なんか潜るらしい。  
男1 なにそれ。  
男2 なんか挑むらしい。  
男1 え、  
男2 ほんでじつと見るねんで。  
男1 全然分からへんで。  
男2 俺も分からへんよ。あいつが言ってる。  
男1 なに見てるの。  
男2 なんもないらしい。  
男1 どういうことやねん。  
男2 分からんけど。でもそうやねんで。見ろよ、お前も。  
男1 なんもないんやろ。  
男2 見ろつて。いいから。見ろ。  
男1、男2 にならつて壁の方を見る。

男1 俺、  
男2 あいつの横には、お前がいてる。  
男1 そうか。  
男2 うん。  
男1 うん。  
男2、ふいに男1にむき直つて、  
男2 車まわしてくるわ。すぐやから、こここで待つて。  
男2、行きかけて、  
男1 なあ、  
男2 え、  
男1 言つとくけどな、  
男2 うん。  
男1 そういうんじゃないからな。  
男2 なが。  
男1 都合がいいからとか、お前なら事情話さんで済むからとか、  
男2 そんなじゃないからな。それだけじゃないから。  
男1 俺はな、  
男2 うん、  
男1 最初に相談したんがお前でほんまによかったと思ってる。  
男2 うん。  
男1 なあ、  
男2 分かてるよ。  
男1 ありがとう。  
男2 うん、  
男1 ほんまに。

男2 待ってて。早く迎えに行かな、あいつまた怒るで。

男2、行ってしまふ。

男1、ひとり、部屋の真ん中でじっとしている。  
しばし間。

玄関が開く音がして、女、顔をのぞかせる。

女 あれ、

男1 おう。

女 ひとり？

男1 うん。

女 なんて。

男1 あいつ車まわしてくるって。

女 ああ。

男1 ほんでお前のこと迎えに行こって。

女 え、あたしこつち来ちゃったよ。

男1 まあいいんちがう。

女 なに。

男1 え、

女 どうしたん。

男1 ああ、いや。懐かしいなあと思って。

女 ああ。

男1 いや、ちがうな。

女 なによ。

男1 懐かしいっていうより、あれ、なんていうの、一昨日まで  
三人一緒に通学してたって言われても、なんか受け入れてしま

いそうやなあって思って。

女 ちよつと分かる、かも。

男1 やばいなあ。

女 やばい、

男1 感傷で窒息しそうや。

女 なにそれ。

男1 切なさでちぎれそうや。

女 泣くの。

男1 泣かへんけど。

女、突然大きな声で、

女 さようなら、古い生活。

男1 なにそれ。

女 知らんの。こんにちは、新しい生活。

男1 なんなん、

女 さようなら、

男1 え。

女 さようなら。ふくふくと愛されたあたし。

男1 (女を見る)

女 さようなら。つるりと美しいあたし。

男1、女のそばに立つ。

肩がふれそうなくらい、すぐそばに。

女 なあ、

男1 うん。

女 見える、

男1 見えてんのかなあ。

女 なにが見える。

男1 なにが。

女 そう、今、なにが見えてる。

男1 荒野。

女 (笑う)

男1 なに。

女 奇遇やなあと思って。

男1 (笑う)

女 でも、あたしが見てるのは荒野じゃないな、あれ。

男1 え、  
女 ちがうわ、よく見たら。  
男1 そうなん。  
女 荒野に建つ一軒の家。  
男1 家、  
女 家の中では家族がそろって晩ごはん食べてる。  
男1 へえ。  
女 お皿でいっぱいテーブル。にこにこの家族。  
男1 いいやん。  
女 そうやる。でもあたしはな、もう二度とあそこに座れない。  
男1 なんで。  
女 だって他の子が座ってるねん。  
男1 え、  
女 あたしじゃない女の子。つるつるの女の子。  
男1 そうか。  
女 憎い。  
男1 え、  
女 なあ、  
男1 なに。  
女 見える？  
男1 なにが。  
女 荒野に建つ家。  
男1 どうやる。  
女 見える？  
男1 家かあ、家なあ、  
女 にこにこの家族とごはん食べてる、つるつるでふくふくの、  
あたしが見える？

二人、ただじっと前を見ている。  
しばし間。

女 迎えに行っただげや。

男1 え、  
女 あいつのこと。  
男1 ああ、  
女 さみしがってるで。  
男1 駐車場まで五十歩くらいやん。  
女 さみしさでエンジンかけられへんって。  
男1 なにそれ。  
女 切なさでギアニュートラルに入れられへんって。  
男1 どういうことやねん。  
女 行っただげや。  
男1 お前は。  
女 あたしはいいよ。  
男1 なんで。  
女 なんでも。  
男1 ふうん。  
女 あとで行くから。  
男1 うん。  
女 うん、  
男1 じゃ。あとで。  
女 うん。

男1、行ってしまふ。

しばし間。

女、ポケットから携帯電話を取り出し、番号を入力し、  
電話をかける。

女 もしもし。あたしです。おかあさんです。

女、壁の前で立ち止まる。

女 元気ですか。風邪ひいたりしてませんか。夜泣いたりしてま  
せんか。

女、持っていた油性ペンで壁にらくがきをはじめた。

女 あたしは元気です。夜はちよつと泣いてしまいました。今日は、

女、らくがきをしている。

女 今日は、あなたにさよならを言おうと思います。

女、らくがきをしている。

女 さようなら。ふくふくと愛されたあなた。さようなら。つるりと美しいあなた。あんたも、あんたもいずれ失うんやで。お気の毒やな。

女、電話を切り、描き終えた絵を見つめる。

かすかにクラクションの音。

女、入り口まで行ってふり返りもう一度らくがきを見る。女、行ってしまふ。

〈2〉

なにもない部屋に少女がふたり。  
少女たち、壁にむかつてしゃがみ、両手を組んで祈るような格好をしている。  
壁には油性ペンで描かれた少女たちの神様。  
少女たちの目の前に広げられたティッシュペーパー。  
その上には結婚指輪。

少女1 いい、

少女2 うん。

少女1 いくで。

少女2 うん。

少女1 せーの、

少女2 あ、ちよつと待って。

少女1 なに。

少女2 今日は、あーめんと、まーかーはんにやーらーと、どっ

ち？

少女1 あ、そつか。

少女2 こないだはあーめんやったやんなあ。

少女1 うん。

少女2 じゃあ今日はまーかーはんにやーらー？

少女1 でも指輪やで。

少女2 指輪、

少女1 指輪はようふう（洋風）やん。

少女2 そつか、じゃああーめんかな。

少女1 うん。

少女2 うん。

少女1 おっけー？

少女2 おっけー。

少女たち、再び両手を組み、目もつむって、

少女1 せーの、  
少女2 ちよっと待って、  
少女1 もう、なーにー。  
少女2 名前は。  
少女1 名前は。  
少女2 指輪の名前。決めるの忘れてた。  
少女1 そっか。  
少女2 うん。  
少女1 幸子。  
少女2 さち、え？  
少女1 幸せな子どもって書いて、さちこ。  
少女2 幸子、  
少女1 そう。はい決まり。  
少女2 えー、  
少女1 なに。  
少女2 うん、  
少女1 嫌なん。  
少女2 うん。  
少女1 なんで。  
少女2 だって小林幸子と一緒にやん。  
少女1 いいやん、べつに。  
少女2 うーん、いいけどー、べつに、  
少女1 すぐくねくねする。  
少女2 嫌っていうかー、  
少女1 やめって、くねくねすんの。  
少女2 嫌じゃないんやけどー、  
少女1 じゃあ、さっちゃんにしよう。それでいい？  
少女2 さっちゃん、  
少女1 うん。  
少女2 なんて。  
少女1 ♪さっちゃんはね、  
二人 ♪さっちこってゆうんだ、ほんとはね、

少女2 結局幸子やん。  
少女1 なんなん、なにが嫌なん。  
少女2 だから嫌じゃないんやけどー、  
少女1 けど？  
少女2 けどー、  
少女1 だからなーにー。  
少女2 日本人なん。  
少女1 え、  
少女2 指輪やからようふうやろ。  
少女1 うん。  
少女2 ようふうやからあーめんやろ。  
少女1 うん。  
少女2 でも幸子はようふうじゃないやん。  
少女1 う、ん、  
少女2 いいの、あーめん。  
少女1 うん、  
少女2 いいの。  
少女1 いいの、  
少女2 なんで。  
少女1 ないからいいの。  
少女2 だからなんで。  
少女1 なんでも。  
少女2 なんでも、  
少女1 だって死んだみたいやん。  
少女2 え、  
少女1 お経あげたら死んだみたいやん。  
少女2 いいやん、だってお葬式やで。  
少女1 そうやけど。  
少女2 お葬式やから死んでて合ってるやん、  
少女1 それはそうやけど、  
少女2 うん、  
少女1 でもごっこやろ。



少女2 蟬のときはまーかはんにやーらーやったで。  
少女1 うん、  
少女2 昔蟬丸って名前の日本人おったからって。  
少女1 あれはだつてほんまに死んでたやん。  
少女2 これも死んでるやん。動かへんで。  
少女1 それはそうやけど。  
少女2 けど、  
少女1 そうやけど、  
少女2 ど、  
少女1 しつこい。  
少女2 (黙る)  
少女1 いいねん、だからもう。  
少女2 (こたえない)  
少女1 あー拗ねた。  
少女2 拗ねてない。  
少女1 拗ねてるやん。  
少女2 なあ、  
少女1 なに。  
少女2 言つてや、  
少女1 なにを。  
少女2 なんです。なんでいいの。  
少女1 なんです。なんで言うのやめや。  
少女2 なんです。なんで思つたこと聞いてなんであかんの。  
だつてあたしなんで思つてんもん。だからなんで聞いて聞い  
てるのに、なんでこたえてくれへんの。  
少女1 だからこたえてるやん。なんでも。  
少女2 だから、なんで、なんでもなん、  
少女1 なんでも言つたらなんでもやねん。  
少女2 だからそれが、なんで。  
少女1 それ以上のなんでは、ないっ。  
少女2 (黙る)  
少女1 拗ねるのやめつて。

少女2 すぐママの真似する。  
少女1 え、  
少女2 ねえちゃんこのママ。  
少女1 べつおかあさんの真似なんかしてないもん。  
少女2 してるやん。ねえちゃん、ねえちゃんママに、前言われ  
てたもん。あたし見たことあるもん。  
少女1 それは、だつて、  
少女2 だつて、  
少女1、むつつりと黙り込む。  
しばし間。  
少女たち、めいめいいじけたように手もとや足もとを動  
かしながら、次を考えている。  
少女1 ごめん、  
少女2 え、  
少女1 ごめん。  
少女2 うん、  
少女1 最後やねんから、  
少女2 うん、  
少女1 最後やねんから、今日。喧嘩やめよう。  
少女2 (こたえない)  
少女1 なあ、  
少女2 分かった。これは幸子で、幸子やけどあーめでいい。  
少女1 ありがとう。  
少女2 うん。  
少女1 じゃあはじめよう。いい？  
少女2 いい。  
少女たち、ティッシュにのせた指輪を前にしやがむ。  
少女たち、両手を組んで目をつむり、祈りのポーズ。

二人 あーめん。

少女1 これより、故・幸子様のゴソウギを執り行います。あーめん。

少女2 あーめん。

少女1 ではまず、お別れの言葉をお願いします。

少女2 はい。幸子さん。幸子さんは本当に働きのがんばり屋さんで、あたしはツネツネ尊敬していました。熱いシャワーにも冷たい水にも合成洗剤にも耐え、ときにはハンバーグや小麦粉だらけになりながら、それでもケンメイに役目を果たしていました。手袋の中ではあったかそうに、ハンドクリームを塗るとうっとりして、誰かと手を繋ぐときは優しそうに笑っている幸子さんの顔を思い出しては、オシイヒトヲナクシタとヒガン、ヒガンニ、

少女1 悲嘆、

少女2 えー幸子さんの顔を思い出しては、オシイヒトヲナクシタとヒタンニクレテイマス。(泣き真似をして) ううっ。

少女1 (泣き真似をして) ううっ。

少女2 幸子さん。がんばり屋さんの幸子さん。どうか安らかに眠りください。そして、いつまでもあたし達を見守っていてください。あーめん。

少女たち、黙礼を交わす。

少女2 (少女1に) お別れの言葉をお願いします。

少女1 はい。幸子さん。セイゼンの幸子さんの可愛らしく美しいお顔を思い浮かべるだけで涙がとまりません。まわりがぱっと明るくなるような笑顔の幸子さんが、まだあたし達のそばにいるようです。幸子さん、と呼べば、はいと返事をして、ここへ来てくれるような気がします。

少女2 (泣き真似をして) ううっ。

少女1 幸子さん、もう会えないのでしょうか、幸子さん。

少女2 (いっそう激しく泣き真似をして) ううっ。

少女1 さようなら。

少女2 (泣き真似をしながら) さようなら。

少女1 いつまでもお元気で。

少女2 お元気でって、死んでんのに変じゃない。

少女1 そっか。

少女2 うん。

少女1 安らかに(続きが言えず)、

少女2 (泣き真似をして) ううっ。

少女1 あーめん。

少女2 お眠りくださいって言った？

少女1 言ったよ。大きい声で泣くから聞こえへんねん。

少女2 そっか。

少女1 うん。

少女2 じゃ、最後のお別れ？

少女1 うん。それでは、お別れのとかがコクイッコクと迫ってきました。

少女2、指輪のつたティッシュを恭しく持ちあげる。

少女1、畳をすこし持ちあげる。

少女2、畳の下にティッシュを置く。

少女1、それを確認してから、ゆつくりと畳を戻す。

少女たち、ふたたび両手を組み、

二人 あーめん。

しばし間。

少女1 終わったな。

少女2 終わった。

少女1 やりきったな。

少女2 いいお葬式やったな。

少女1 うん。

少女2 なあなあ、  
少女1 なに。  
少女2 あたし今日泣くとこめっちゃじょうずじゃなかった？  
少女1 ああ、  
少女2 迫真の演技じゃなかった、今日。  
少女1 あんたいっつもじょうずやん。  
少女2 だってな、ねえちゃんの声聞いてたらほんまに涙出そうになってる。すごくない？  
少女1 すごいすごい。  
少女2 特にな、もう会えないのでしょうか、のところ。  
少女1 ああ、  
少女2 胸のところがきゅーんってなって、鼻っーんってなって、目があっーくなっって。  
少女1 うん、  
少女2 あー楽しかった。  
少女1 うん。  
少女2 楽しかったな。  
少女1 うん。  
少女2 幸子天国いったわ、絶対。  
少女1 (こたえない)  
少女2 まあ。  
少女1 え。  
少女2 やっぱねえちゃん天才やな。  
少女1 なに急に。  
少女2 だってこんなおもしろい遊び考えつくのねえちゃんくらいやで。  
少女1 そうかな。  
少女2 そうやって。だってあたし最近クラス的女子グループと遊んでも全然おもんないねんで。  
少女1 そうなん、  
少女2 あーあ、来週からどうしようかなあ。  
少女1 (こたえない)

少女2 ねえちゃんほんまに来週からおらへんの。  
少女1 そうやなあ、  
少女2 こんなんひとりでもおもんないしな。  
少女1 あかんよ。  
少女2 え。  
少女1 ひとりでこんな遊びしたらあかん。  
少女2 うん、  
少女1 こんなどこひとりで入ったら絶対あかんで。  
少女2 分かてるよ。  
少女1 ほんまに分かてる？ クラスの子とも絶対来たらあかんねんで。  
少女2 なに急に。  
少女1 だって、  
少女2 うん。  
少女1 心配になるようなこと言うから。  
少女2 今ねえちゃん、めっちゃ不細工やで。  
少女1 うるさいわ。  
少女2 あっ、なあなあ、  
少女1 なに。  
少女2 あれ見せて。  
少女1 どれ。  
少女2 寄せ書き。  
少女1 寄せ書き？  
少女2 転校する子絶対もらうやん、クラスのみんなから。  
少女1 ああ、  
少女2 あとあれ、プロフィール帳。交換した？  
少女1 (こたえない)  
少女2 あれも見たい。見せて。  
少女1 ない。  
少女2 え、  
少女1 ない。  
少女2 プロフィール帳？

少女1 寄せ書きも。  
少女2 なんて。  
少女1 言ってるないから。  
少女2 え、  
少女1 引越すこと。誰にも。  
少女2 なんて。  
少女1 なんでも。  
少女2 ふうん、  
少女1 うん。  
少女2 そっか。  
少女1 いいねん、べつに。  
少女2 うん、  
少女1 あたし今のクラスすきじゃないから。  
少女2 そうなん。  
少女1 四年のときの方がよかつたし。今の担任おぼはんやし。  
少女2 でももつたいないな。  
少女1 え、  
少女2 プロフィール帳、ちよつとほしくない？  
少女1 (こたえない)  
少女2 ねえちゃんが言ったん。  
少女1 (こたえない)  
少女2 引越すのこと言わんといてって。  
少女1 ううん。  
少女2 ふうん、  
少女1 おとうさんが先生に頼んだ、  
少女2 ああ、  
少女1 かもしらん。  
少女2 そっか。  
少女1 先生がな、あたしが転校したことは、週明け先生から  
少女2 みんなに伝えますって。  
少女1 言ってたん、  
少女1 うん。

少女2 そっか。  
少女1 あいつ、おぼはん。  
少女2 そうかな、  
少女1 おぼはんやで。  
少女2 でも結構可愛くない、色白いし、まつげ長いし。  
少女1 化粧濃いだけやん。  
少女2 えー、  
少女1 あたしあいつ嫌いやねん。馴れ馴れしいし、うんうん、  
分かるわよお、とか言うし。  
少女2 べつによくない、  
少女1 すぐあたしの頭に手のせたりするし。  
少女2 あたしはなでなですきやで。ママもよくやるし。  
少女1 なんかそういうのとはちがうねん。  
少女2 なんか、  
少女1 うん、  
少女2 難しいな、ねえちゃん。  
少女1 (こたえない)  
少女2 あたし普通に嬉しいもん、  
少女1 (こたえない)  
少女2 話聞いてもらうんとか、頭なでもらうんとか。  
少女1 (こたえない)  
少女2 それにあの先生さあ、他の先生みたいにジャージじゃないやん。  
少女1 (こたえない)  
少女2 な。いつも普通の服着てるやん。  
少女1 (こたえない)  
少女2 だからあたし結構すきやで。  
少女1 (こたえない)  
少女2 な。  
少女1、壁の神様をなぞっている。

少女2 なあつて。  
少女1 (こたえない)  
少女2 あー拗ねた。

少女1、神様をなぞっている。

少女2 あー拗ねた。  
少女1 (こたえない)

しばし間。

少女1 なあ、  
少女2 なに。  
少女1 言ったらあかんで。  
少女2 え、  
少女1 誰にも。  
少女2 引越しのこと、  
少女1 それは、  
少女2 うん。  
少女1 いいねん。どうせ来週にはおばはんが言うねん。  
少女2 そつか。  
少女1 これ。  
少女2 うん、  
少女1 お葬式ごつこのこと。  
少女2 ああ。  
少女1 神様のこと。  
少女2 うん、  
少女1 ここにいっぱいマイソウされてること。  
少女2 うん、  
少女1 この部屋にこつそり入れること。  
少女2 うん。  
少女1 言ったらあかん。

少女2 分かった。  
少女1 絶対。  
少女2 うん、絶対。  
少女1 このことも、今までいっぱいお葬式してきたことも絶対秘密。他の誰ともお葬式したらあかん。ひとりでも、ここに来たらあかん。  
少女2 分かったつて。  
少女1 約束。  
少女2 うん、約束。

少女たち、たがいをじっと見る。

少女2 (笑つて)めつちや真剣。  
少女1 真剣に約束してるねん。  
少女2 でもさつきより不細工じゃない。  
少女1 うるさいわ。  
少女2 ねえちゃん、  
少女1 なに。  
少女2 夏休みとかさあ、  
少女1 うん、  
少女2 こつち帰ってけえへんの？  
少女1 うーん、  
少女2 冬休みとか、春休みとか。  
少女1 どうやる。  
少女2 もし帰ってきたらさ、そのときだけ、また今みたいに  
お葬式しようや。  
少女1 帰ってきたらな。  
少女2 絶対。  
少女1 でも無理かしらんもん。  
少女2 なんで。  
少女1 めつちや遠いから。おばあちゃん家。  
少女2 新幹線でも？

少女1 新幹線やったら時間かかるから、飛行機やって。  
少女2 飛行機。  
少女1 うん。  
少女2 すごーい飛行機乗んの。  
少女1 うん。  
少女2 え、でも日本やんな。  
少女1 当たり前やん。  
少女2 じゃあ大丈夫。夏休みになったら帰ってきてな。あと冬休みと春休みも。  
少女1 (こたえない)  
少女2 絶対。  
少女1 (こたえない)  
少女2 ねえちゃん。  
少女1 あたしより、あんたこそ約束守れんの。  
少女2 守るよ。守れるよ。  
少女1 めっちゃ不安やねんけど。  
少女2 誰にも話さへんって。だからねえちゃんも約束。夏休みになったら帰ってきてな。あと冬休みと春休みとゴールデンウィーク。  
少女1 (こたえない)  
少女2 あ、  
少女1 なに。  
少女2 いいこと考えた。  
少女1 なによ。  
少女2 誓おう。  
少女1 え、  
少女2 神様に。  
少女1 なんて。  
少女2 あたしは、お葬式ごっこのこと誰にも話しません。  
少女1 うん。  
少女2 ねえちゃんは、夏休みと冬休みと春休みとゴールデンウィークとシルバークウィークに帰ってきて、またあたしとお

葬式ごっこしますって。  
少女1 ちよつとずつ帰る回数増やすのやめてくれへん。  
少女2 なあ、そうしよう。めっちゃいい考えじゃない。  
少女1 うん、  
少女2 じゃあ、あたしからな。  
少女2、壁の神様に手をあてて、  
少女2 あたしはお葬式ごっこのこと誰にも話しません。  
少女1 絶対、一生、誰にも、やで。  
少女2 一生、  
少女1 そう、一生。  
少女2 え、それどれくらい。  
少女1 だから死ぬまで。  
少女2 死ぬまで、  
少女1 そう。学年あがっても、中学生になっても高校生になっても、大人になっても結婚して子どもができて、おばあちゃんになっても孫ができて。  
少女2 なが、  
少女1 平均寿命まで生きるとして、あと八十年くらい。  
少女2 ながー。  
少女1 うん。  
少女2 しんどのいあん、  
少女1 しんどのいよ。  
少女2 死ぬ間際には言っている、  
少女1 えー、  
少女2 お願い。  
少女1 死ぬ間際はもつと他のこと言った方がいいと思うけど。  
少女2 他のことって、  
少女1 家族にありがとうとか。  
少女2 じゃあありがとう言ったあとに、言うわ。  
少女1 そんな体力あるん。

少女2 残しとく。

少女1 やっぱあかん。死ぬ間際もあかん。

少女2 えー、

少女1 えーじゃない。

少女2 ほんまに一生言ったらあかんの。

少女1 そう。はい、神様に誓って。お葬式ごっこのこと、絶対一生誰にも話しません、かつこ、死ぬ間際までって。

少女2 分かった。見ててや。

少女1 うん。

少女2、ふたたび壁の神様に手をあてて、

少女2 あたしは、お葬式ごっこのこと、絶対一生誰にも話しません、かつこ、死ぬ間際まで。

少女2、壁から手を離す。

少女1 これであんたはもう誓ってんからな。

少女2 そうやで。

少女1 誓いは、なにがあっても守らなあかんねんで。

少女2 うん。

少女1 分かってる？

少女2 うん、分かって、るー。

少女1 なんてくねくねすんの。

少女2 いや、もうすでに口のあたりがもぞもぞしてきて。

少女1 ちよっとー。

少女2 あー苦しい。あと八十年もこんなんか。

少女1 だから簡単に誓ったらあかんねん。

少女2 え、

少女1 言い出したん、あんたやで。

少女2 じゃあ次ねえちゃんな。はい誓って。夏休みと冬休みと春休みとゴールデンウィークとシルバーウィークに帰って

来て、またあたしとお葬式ごっこしますって。

少女1 あたし、

少女2 はい、早く早く。

少女2、少女1を神様の前に座らせる。

少女1、神様に手をあてる。

少女1 あたし、

少女2 うん。

しばし間。

少女1 神様、さようなら。どうか安らかにお眠りください。

いつまでもあたし達を見守っていてください。あーめん。

少女2 (びっくりしている)

少女1 ごめん。

少女2 どうしたん、

少女1 ごめん。

少女2 なんです。

少女1 あたし、

少女2 うん。

少女1 だってあたし、守られへんと思うから。

少女2 え、

少女1 ごめん。

少女2 あれやで、夏休みと冬休みと春休みとゴールデンウィークとシルバーウィークって言っても、それ全部に帰ってこなあかんわけじゃないねんで。

少女1 分かってる。

少女2 それならいいんやけど、

少女1 でもあたし、もうここ戻らへんと思う。

少女2 え、

少女1 うん。

少女2 えー、  
少女1 うん。  
少女2 なんです。  
少女1 なんでも。  
少女2 だからなんです。  
少女1 だって家がなくなるねんもん。帰るって、どこに帰るねん。  
少女2 (黙る)  
少女1 うん。  
少女2 そっか、  
少女1 これからあたしが帰る場所は、おばあちゃんの家やねん。おとうさんと、おかあさんがいたこの街のあの家じゃなくて、飛行機乗って行った先の、おとうさんとおばあちゃんがいる家になるねん。  
少女2 うん、  
少女1 そうなるねん。  
少女2 泊まりにきて。  
少女1 え、  
少女2 夏休みと冬休みと春休みとゴールデンウィークとシルバードウィーク、泊まりにきて。それやったらいい？  
少女1 (こたえない)  
少女2 それかうちの子になって。それやったらいい？  
少女1 (こたえない)  
少女2 あたしおかあさんに聞いてみる。ねえちゃん、うちの子になってもいいって。あたしの妹まだ年少さんやけど、これで三人姉妹。いいやん。な。  
少女1 嘘やん、そんなん。  
少女2 え。  
少女1 あんたんとこの子になっても、そんなん嘘の家族やん。

しばし間。

少女1 嘘ついたらな、  
少女2 え。  
少女1 嘘ついたら、嘘に自分の場所とられるねんで。  
少女2 なにそれ。  
少女1 今のあたしの家な、  
少女2 うん、  
少女1 もう売っちゃうねんて。  
少女2 そうなん。  
少女1 うん。  
少女2 じゃあ他のひとが住むってこと、  
少女1 たぶん。  
少女2 ふうん。  
少女1 だからな、  
少女2 うん。  
少女1 だからもしおかあさんが、  
少女2 え。  
少女1 もしおかあさんが帰りたくなくても、その場所がない。  
少女2 (黙る)  
少女1 おかあさん嘘つきすぎでん。だから自分の場所、嘘にとられた。だからおらんようになってんて。  
少女2 うん、  
少女1 おばあちゃんが言った。  
少女2 うん。  
少女1 でもおかあさん誓ったからさあ。絶対戻ってくるって。あたしに会いに戻ってくるって。この指輪に誓うって。  
少女2 ねえちゃん、  
少女1 せっかく戻ってきてても、そこにあたしも、あの家もなかつたらかわいそうやんなあ。おとうさんちよつとひどいと思うわ。なあ。  
少女2 だからあの指輪のお葬式したん。  
少女1 (こたえない)  
少女2 指輪死んだら、誓いはチャラになるん。



少女1 (こたえない)

少女1、神様をじっと見ている。  
少女2、少女1にならって壁を見ている。

少女2 幸子。

少女1 え。

少女2 指輪の幸子、

少女1 ああ。

少女2 他のみんなと仲良くできてるかなあ。

少女1 さあ。気合わへんやつも中にはおるんちがう。

少女2 たとえば、

少女1 たばこのヤニとりフィルター。

少女2 (笑って) 他には、

少女1 ちっちゃい栓抜き。

少女2 あったなあ。

少女1 使いかけの目薬。

少女2 赤ちゃんのくつ下。

少女1 定規。

少女2 ぶたのかたちの石。

少女1 あったあ。

少女2 あたしの乳歯。

少女1 うん、

少女2 紙石鹸。

少女1 蟬の死骸。

少女2 こけしの耳かき。

少女1 交通安全のお守り。

少女2 誰かの名刺。

少女1 ヘアピン。

少女2 なんかのケーブル。

少女1 びりびりの漫画。

少女2 使いかけの口紅。

少女1 将棋の駒。

少女2 かみそり。

少女1 ピアスのキャッチ。

少女2 縫い針。

少女1 王将のクーポン。

少女2 水風船。

少女たち、かつて埋葬したものの達の名を呼び続けている。

〈3〉

部屋の中央に座卓。  
まわりに男が三人。

座卓には人生ゲームが広げられている。

部屋の隅に小さなテレビ。

テレビにはゲーム機が繋がれ、まわりにはゲームソフト  
やDVDが積まれている。

映像が流れているのか、テレビ画面がチカチカ光る。

男C、男D、人生ゲームの金を数えている。

男A、指先でなにかをつまみ、他のふたりからすこし離  
れたところに立っている。

男A あかん、もう乗らへん。

男C、男D、金を数えている。

男A もう乗らへんわ、これ。ねえ。

男A、指先のなにかを他のふたりに示している。

男Aが持っているのは人生ゲームに使うおもちゃの車と  
人間らしい。

男D (男Cに) ここへきてまだできるか、あれ。

男C (男Dに) ほんまに。

男A 見てくださいよ、これ、これはもうどうやっても無理でし  
よ。

男D (男Cに) あいつ無職やろ。

男C (男Dに) はい。

男D (男Cに) 生殖能力だけはやたらあんなな。

男C (男Dに) ジリ貧ですやん、だから。

男A ていうか、これどう見ても六人乗りですよ、これ。

男C さっき乗せ方教えたったやん。

男A それはやってますよ、やってますって、ほら、真ん中にひ  
とり寝てるでしょ、これね末っ子なんです。末っ子長男。やっ  
とできた男の子なんです。だからもう可愛くて可愛くて。

男D あれらしいな、うまい方が男の子でできるらしいな。

男C え。

男D セックス。

男C なんなんですか、急に。

男D だから、女きようだいばかりの家の親父っていうのは、

あれ、奥までちゃんと突けてないって。

男C やめてくださいよ、そういうの。

男D 関係あるらしいで。

男C 知りませんで。

男A ねえ、ほんまこれどうしたらいいと思います。

男D 殺せ殺せ。口減らしじゃ。

男A 無理や。そんな無理や、できひん。お腹痛めた実の子を、

そんなん、僕できませんよ。

男C べつにお前は痛めてないやろ。

男D つくるだけで始末はできひんのか、情けないな。

男C 嫁捨てれば。

男A えっ。

男C 子ども捨てられへんのやったら嫁捨てるしかないやん。だ  
ってもう乗らへんねやろ。

男A えー。

男D 嫁おらんでも子どもはできるしな。

男A いやーでも、

男C なんでもいいけど、先進めようや。

男A 僕これ、車が悪いと思うんですよ。なんで六人乗りやねん。

男C 俺とつくに回したで。

男A だってこれ六人しか乗れないですよ、穴六個しかないもん。

男D 穴？ (男Cに) 穴ろっこやって。

男A さっき教えてもらった裏技使っても七人が限界や。でも長  
男だっつてすぐに大きくなる。ずっと寝かせておくわけにはいか

ないでしょう。

男C ほんならあれや、お前だけ車二台にしたら。

男D それいいやん。嫁に免許取らせて、車もう一台買うねん。

男A そんな金どこにあるんですか。

男D それがお前が大型免許取って、バス買う。大家族、バス移

動。じゅーん。

男A だから、そんな金、

男C いいからもう次回そうや。

男A おかしいですよ。人口減ってるから子どもつくれ言ってる

のは国でしょう。子ども手当やなんじやって言ってるけど、そ

んなもんたかが知れてるし。子どもはねえ、金かかるんですよ、

金。学校とか病院とか、それだけじゃないんです。

男D あ、俺ご祝儀まだやった。

男C もうあがってるから払わなくていいんですよ。

男D あ、そうか。そうなん？

男C はい。

男D お前払った？

男C なけなしのいちまん円。

男A すっぱんぼんで、母乳だけで、一生暮らせるわけないじゃ

ないですか。

テレビからドーンと爆発音が聞こえる。

一同、テレビを見る。

ドンドンと音がして、部屋全体がかすかに揺れる。

一同、様子をうかがう。

玄関の方で物音。

男B、やってくる。手にはビニル袋。

男B おお、

男C なんやねん。

男B いや、みんなで一斉に見るから。

男C ああ、まあ。

男B 遅かったです？

男C べつに

男D お前あれや、

男B はい。

男D ピンポンくらいしろよ。

男B ピンポン？

男D ピンポン。

男B 僕ん家やのに？

男D 関係あるか。

男B (納得できないけどとりあえず) すみません。

男C 全部あつた？

男B あ、はい。

男B、座車の空いたスペースにビニル袋の中をあける。

袋の中からたばこ数種類とおにぎりがいくつか。

男D、たばこを取ってテレビの前へ。

男B え、てか、まだ終わってないんすか。

男D 俺はあがったで。

男C こいつ全然次回さへんねん。

男B (男Aに) なんで。

男A 無理難題を前に立ち往生や。

男B なにそれ。

男C 家族全員車に乗りきらへんねん。

男B 二台に分けたらいいやん。

男C ほら。

男A いやだからね、金が、

男C あーじゃあ、じゃあな、今年度から、子ども四人？ 五人

か、以上の家庭には無償で車が支給されんねん、地方自治体か

ら。な。だから、維持費もなんもかからんと、車二台持てんの。

男A そうなつてん。嫁の免許問題はどうするんですか。

男C んー、お前の嫁さんは、教習所で働いとつてん、女性教官な。だから免許持ってる。なんならお前より運転うまい。お前が一目惚れしてん。口説き文句は、課外授業お願いします。これでもいいこう。

男B (男Dに) なんの話ですか。

男D さあ。

男A なるほどなー。クラッチうまいこと使える女のひとかつこいいですね。

男C うん。だから、はい、早く回して。

男A じゃあ僕二台目の車黄色にしよう。やっぱ、自分の金ちがうと思うとちよつと冒険できますよね。

男C 分かったから早く。

男A、二台目の車を用意してマスに乗せる。

男A、ルーレットを回す。

プラスチックがぶつかり合う音が響く。

男B、男Dの横に並んでテレビをのぞく。

男B 今、どんなかんじです？

男D え。

男B 今。

男D ああ。

男D、たばこに火をつける。

男A、男C、順番にルーレットを回し、コマを進める。

男D 俺おにぎり食べよ。

男B たばこ吸いながらですか。

男D いいのん先取っとかな。

男B ああ。

男D お前は？ ツナマヨか明太マヨ。

男B できればマヨってないやつで。

男D じゃあ梅やな。

男B 焼肉ナントカつてあったでしょ。それで。

男D なんやねん、お前。

男B なにがですか。

男D 厚かましいな。

男B 僕が買ってきたんですよ。

男D 関係あるか。

男B (納得できないけどとりあえず) すみません。

男D、男Bにおにぎりをひとつ手渡す。

男B おかかやん。

男D 外どうやった。

男B え、

男D 外。

男B ああ、

男D うん。

男B、おにぎりを食べながら、

男B 僕ねえ、

男D うん、

男B 僕花粉症なんですよ、

男D おお。

男B 結構ひどめの。

男D へえ。

男B 薬とか注射とかあんまり効かなくて。

男D 大変やな。

男B はい。ブタクサなんで、ちよつとひととタイミングずれる

男D なんですけど。

男D うん。

男B はい。

男D うん。え。で、え？  
男B 辛かったです、だから。  
男D え、  
男B 外。  
男D ああ。  
男B はい。  
男D ふうん。  
男B はい。

男D、テレビを見ている。  
男B、おにぎりを食べながらテレビを見ている。  
テレビ画面が光っている。  
男A、男C、ゲームを続けている。

男B ていうか、思うんですけど、  
男C なに。  
男B このルールおかしくないですか？  
男A なんです。  
男B 僕せっかく一番にあがったのに、なんでパシリ。  
男A いいやん、べつに。  
男B でも一番やで。  
男C 順番関係ないやろ。  
男A そうやで、俺らがゴールするまで誰が一位か分からへんね  
んで。  
男B ベベタはお前やろ。  
男A それは最後まで分からへんでー。  
男D あほかお前。  
男A えっ。  
男D (男Bに) お前じゃ。  
男B 俺か。  
男D お前なあ、ひとりでとつとあがつてな、他の奴らが七転八  
倒してるところのほほんときくさるとかな、お前あれやで、

男B なんすか。  
男D あかんで。  
男B いや、いいじゃないですか、それくらい。そのためにがん  
ばってきたんですもん。

テレビから銃声が聞こえる。

男A あー、こいつ、  
男C どうしたんですか。  
男A じいちゃん死んで山が手に入った。借金返せる。  
男D まじで。完済？  
男C いや、まだ半分残ってますわ。  
男D いいねいいね。  
男A えっこれ相続税払わなあかんの。  
男D おーいいいよ。  
男A ほんでしかも結構取られんなあ、これ。  
男B うつとうしいなあ、税金。  
男C コバエのようについてまわんねん。  
男A なんで嬉しそうなんですか。  
男C なんでもかんでもうまくいかへんってことやな。  
男A だからなんで嬉しそうなんですか。  
男C いいから早く払えよ、税金と借金。  
男A、金を数えて男Cに渡す。  
男A あーあ、出た。あつという間や。俺のこと通過してっ  
ただけ。

男C、ルーレットを回し、男Aと男Cはゲームに戻る。  
男D、テレビを見ている。

男B どうなりました？  
男D え。  
男B 今。  
男D いいとこやで。  
男B うわーえぐー。  
男D なあ。  
男B 生きてるんですか、これ。  
男D 知らん。  
男B あーえぐいー。  
男D ほんまに。  
男B あかん、見てられへん。  
男B 男B、言いながらおにぎりの山を物色する。  
男D、食い入るようにテレビを見ている。  
男B 出してきました、  
男D、一瞥もくれず。

男B よ。葉書。  
男D (こたえない)  
男B ちがうところで、  
男D (こたえない)  
男B あの、区超えたところの。  
男D (こたえない)  
男B ねえ、  
男D え。  
男B だから、葉書。  
男D ああ、  
男B はい。  
男D アリガト。  
男B いや、

男B なんかもつと、  
男D (こたえない)  
男B ねえ。  
男D なんやねん。  
男B だから、  
男D なんやねん、お前なにがいいの。  
男B なんでもいいですけど、なんかもつとポップなの。  
男D ポップ。  
男B この際これじゃなかったら、なんでもいいですよ。  
男D お前あれやな、  
男B は、  
男D たまにめっちゃまともなフリするな。  
男B フリって。僕まともですやん。少なくともこん中やったら  
男D いちばん。  
男D (笑う)  
男B なんで笑うんですか。しかも鼻で。  
男D 笑ってへんよ。  
男B いや、今笑いましたよ、しかも鼻で。  
男D 俺さあ、思うねんけどな、  
男B はい。

男D 根っから腐ってる奴っておると思う。

男B どういうことですか。

男D 前世で悪いことしたんかしらん、そういうレベルで、魂から腐ってる、性根の部分から終わってる奴っておると思うねん、悲しいかな。

男B 僕そんなんちがいますよ。

男D そういう奴はな、やっぱ臭うねん、腐ってるから。いわゆる腐敗臭やな。本人は必死に隠してるつもりかしらんけど、そういうのって隠せば隠すほど臭ってくるから。

男B なんの話ですか。

男D だから、

男B はい。

男D 集まんねん。おなじ臭いをもつ者同士。ほんでな、それに群がるコバエもな、これもまためちやくちや多いってこと。

男B 聞いていいですか。

男D なに。

男B 誰に出してるんですか、葉書。毎月。

テレビからドーンと大きな爆発音。

それに合わせて、男C、立ち上がり、

男C よっしゃー。

男B あ、終わりました？

男C 俺これ絶対一位や。

男C、ゲームの金を数えはじめる。

男B、座卓の方へ寄る。

男A またや。また俺よりも先に世界が消滅してしまった。

男C お前も早く数えろよ、財産。

男B こいつ借用书以外持ってないんちがいます。

男A なんでなん。なんで世界、すぐ消えてしまうん。

男C 分かったから早くしろよ。

男B そうやってぐずぐずしてるから、毎回取り残されんねん。

男A うるさいわ。

男A、金を数え、男C、壁に貼ってあるスコア表に各々の持ち点を記入する。

記入が終わると、男A、男B、男C、表をのぞき込む。

男B 結果発表ー。

男C、男B、男A、順に手を挙げて、

男C 一位っ。

男B 二位っ。

男A えっ俺三位。うそやん、やったー。

男C てことは最下位は、

一同、男Dを見る。

男D え、

男C ですね。

男D まじで。

男A 御愁傷様です。

男D うそやろ、え、お前は。

男A 僕三位でした。

男D お前、

男A なんすか。

男D インチキしてへんやろな。

男A してませんよ。てか、人生ゲームでインチキってどうやるんすか。

男C やっぱ株やったんが失敗でしたね。

男B あ、あれ結局どうなったんですか。

男A 買った株ことごとく暴落してん。  
男B まじで。  
男A ほんで最後の方で国債も買ったけど、満期なる前にあがっ  
てもうて。  
男D お前なに調子乗ってべらべら喋るとんねん。  
男A すみません。  
男D ほんでお前もなに笑っとんねん。  
男B えー僕全然笑ってないですよ。  
男D うるさい。笑ってるわ。  
男B 八つ当たりや。子どもじゃないねんから。  
男D どつくぞ、お前。  
男A やっぱあれですね、  
男D なんやねん。  
男A ほんまにやばいひとは静かに沈んでいくんですね。僕みた  
いに大騒ぎする奴はまだまし。  
男D ああ。  
男A 罰ゲームですよ。  
男D 分かってるわ。  
男A 罰ゲームですからね。  
男D 分かってるって。なんで二回言うねん。  
男A いやあ、  
男C こいつほんまに調子乗りやな。  
男B さっきまでのあれなんやってん。  
男A あー勝利の空気は清々しいなあ。  
男B いうてもお前三位やからな。  
男C そうやで、マイナス累積で次はお前が罰ゲームの可能性も  
あんねんで。  
男A いやー勝利の空は青いなあ。  
男B 見えへんやん、空。  
男C (男Dに) 回します？  
男D さっさとやっつたるやんけ。

男D、人生ゲームのルーレットに手をかける。  
男A それでは、元気に一発、どうぞー。  
男D うつとうしいな、お前はほんまに。  
男D、ルーレットを回す。  
プラスチックがぶつかり合う音が響く。  
男たち、じっとルーレットを見つめている。  
ルーレットはやがて止まる。  
男たち、声をあげる。  
男D、喜び、男B、うなだれる。  
男B うそやろー。  
男A 久しぶりに出ましたね。  
男D やっぱ俺もってるわ。  
男B うそやろーえー。  
男C たしかに、これはもってますね。  
男B いや待って。これ、これさあ、  
男A なんやねん。  
男B 待って、もう一回。もう一回回しません？  
男A 罰ゲームルーレットは一投だけの決まりやで。  
男B もう一回だけ。お願い。  
男A 往生際が悪いなあ。  
男B いやだっておかしいやん、これ。おかしいよ。  
男C でももう一回回しても、また同じが出る可能性もあるね  
んで。  
男D もう一回これ出たら笑うな。  
男B だってなんなんですか、この罰ゲーム。てか、罰でもない  
し、これ。俺に罰やし。俺が食らう罰やし。  
男A、C、笑っている。



男D 俺やっぱ最下位でももってるわ。  
男B なしなし。今回のこれは、なし。ねえ、今から新しい罰ゲーム考えましょう。そうしましょう。それからもう一投。ね。  
男A でもいい罰ゲーム十個もないねんて。  
男B いいのでなくていいやん。裸で町内一周とかそんなんで。  
男C 裸系は三と被るやん。  
男B じゃあ逆立ちでラーメン食べるとか。  
男C それは九やろ。  
男B じゃあ、牛乳で、なんか、する、  
男A それは四と五ですでに若干被ってるねん。  
男B 多少被っててもいいやん。  
男A あかんよ、おもしろくないやん。  
男B もっとみんなが楽しいやつにしようや。  
男A 俺ら楽しいで。(男C) ねえ。  
男C うん。  
男D 俺も楽しい。  
男B もー。  
男D しかもな、めっちゃ楽しい。  
男B、うなだれる。  
男A、男C、男D、それを見て笑っている。  
男C ま、なんでもかんでもうまいかへんってことやな。  
男A ひとりだけさっさとあがって高みの見物してるからそういうことなんねん。  
男C いつまでもぐずぐず言ってるんや。  
男D よし、いこか。  
男A (男Dに)お願いします。  
男D いざ、尋常に。  
男D、ズボンのベルトを緩めながら壁にむかう。  
男A、男C、歓声をあげる。  
男D、壁の前に立ち止まり、ズボンとパンツをおろす。  
そこにはらくがきの神様がいる。  
男D 敵艦見ゆ。敵艦見ゆ。主砲発射用意。  
男D、構える。  
男D 撃てー！  
男D、壁に描かれた神様を目がけて、小便をする。  
男A、男C、腹を抱えて笑っている。  
じよろじよろと音がしている。  
やがて音は小さくなり、止む。  
男D、収めて、歓声とも奇声ともつかない声をあげる。  
男D どや。  
男B (こたえない)  
男D 空母撃沈や。安心しろ。  
男B 知りませんよ。  
男D (男Bの肩を叩いて)な。安心しろ。  
男B 知りませんで。  
男A、壁に近づいて、  
男A あーくさい。  
男B もうー、  
男C 俺も俺も。  
男C、壁に近づいて、  
男C ほんまや。  
男A でしょ。

男 B ふたりとも喜びすぎやねん。

男 C、濡れた壁をじっと見ている男 D に気づいて、

男 C なに見てるんですか。

男 D いや、いい出来やなと思つて。

男 C なんすかそれ。

男 D お前なにに見える。

男 C え、

男 D ちがう、(男 B に) お前。

男 B え。

男 D お前ん家やろ。

男 B え、

男 D ここお前ん家やろつて。

男 B そうですけど、急になんですか。

男 D お前ん家のこれ、なにに見える。

男 B いや、なにつて、

男 A あ、なんかありますよね、模様がひとの顔に見えたりする

現象、(男 C に) あれなんていうんでしたっけ。

男 C 知らんよ。

男 D (男 B に) なあ、なにに見える。

男 B なにも見えないです。

男 D お前ちゃんと見ろよ。

男 B 見えますよ。

男 A 俺なにに見えるかな。

一同、壁をじっと見る。

しばし間。

テレビからは爆発音がしている。

男 B (男 D に) なに見えるんですか。  
男 D 俺？

男 B はい。

男 A えー俺なにに見えるかなー。

男 D 俺はなあ、

男 B はい、

男 A これつて、うまいこと焦点合ったらとび出して見えるんで

すよね。

男 C それまた全然ちがうやつやろ。

男 D 俺にはなあ、

男 D の声をかき消すように一層大きな爆発音。

一同、男 D のこたえに声をそろえて笑う。

爆発音に紛れてサイレンが鳴っている気がする。

ドンドンという音とともに、部屋全体がかすかに揺れる。

一同、壁にできたシミを見つめている。

爆発音は次第に大きくなる。

〈4〉

段ボールがたくさん並んだ部屋に姉。  
引越しの準備中である。  
姉、ひとつの段ボールの前に座り、葉書を読んでいる。  
葉書は段ボールの中にたくさん入っている。

姉、読んでいた葉書を段ボールの中に戻す。  
姉、その様子をちらりと見る。  
姉、ちらりと見た妹を、ちらりと見る。

姉 (声だけ) おねえちやーん、  
姉 (葉書に目を落としたまま) なにー。  
姉 (声だけ) これさー、  
姉 うんー。  
姉 (声だけ) ビール、あるはあるけど全然冷えてないー。  
姉 うそー。  
姉 (声だけ) これさー、  
姉 うんー。  
姉 (声だけ) ちょっとこれ冷凍庫入れといていいー？  
姉 (葉書に目を落としたまま) えー？  
姉 (声だけ) あかーん？

妹、さらになにか言うが、よく聞こえない。  
しばし間。  
妹、やってきて、

姉 聞いてないやる。  
姉 え、  
姉 もう。  
姉 聞いている聞いている。  
姉 おぼえてといてな。  
姉 なにを。  
姉 だからビール。冷凍庫。  
姉 入れたん？  
姉 ほっといたら爆発するから。  
姉 ああ。

姉 進んでるな。  
姉 え。  
姉 思ったよりは、やけど。  
姉 ああ。  
姉 手付かずやったらどうしようかと思った。  
姉 さすがにそれはないわ。だってもう明後日やで。  
姉 あたし引越し屋が来る直前まで荷造りしてたことある。  
姉 だらしな。  
姉 てか、あれなに、  
姉 え、  
姉 トイレ。  
姉 ああ、  
姉 パンツ落ちてんの。  
姉 あんた来るまで磨いててん、便座。  
姉 パンツで？  
姉 あかんの。  
姉 いやだって、あれ、だって紐やったで。  
姉 うん。  
姉 どこで磨くねん。面がないやん、面が。  
姉 それはだから、こうやって、  
姉 いやいや、  
姉 だってストッキングとかも使うやん、そうじに。  
姉 それはでも全然ちがうやる。  
姉 だから、パンツも、こう、

姉、なにかを丸め、どこかを擦る真似をする。  
しばし間。

姉、耐えきれなくなつて、

姉 ごめん、  
妹 え。  
姉 ごめん。やっぱやろう。やっちゃおう。  
妹 もう？  
姉 だって今これなんの時間ってかんじやん。  
妹 まあそうやけど。  
姉 うん、そうする。そうしよう。ごめんごめん。やろやろ。  
妹 でもビールないで。  
姉 あー。  
妹 冷やしとかへんから。  
姉 あー。  
妹 買ってこよか。  
姉 うーん。  
妹 だって。飲まんとやんの。  
姉 うーん、  
妹 なによ。  
姉 この期におよんで荷物増やすの嫌やねんけど。  
妹 それはそうやろうけど、  
姉 うん、  
妹 飲んでしまえばいいやん。残ったらあたし持って帰つたるよ。  
姉 そうやねんけど、  
妹 なんやねん。  
姉 ちよつと、今ちよつとさあ、  
妹 うん、  
姉 ひとりにせんといて。  
妹 (笑う)  
姉 ひくのやめて。  
妹 いや、ごめん、  
姉 笑っても呆れてもいいから、ひかんというて。  
妹 ごめんごめん、ちよつとこころの準備ができてなかったから。

姉 優しくして。なるべく気遣つて。  
妹 そうしてるつもりやけど。  
姉 うそ。ごめん。感謝してる。ありがたいと思つてる、めっちゃくちや。  
妹 (笑う)  
姉 だからひかんというて。  
妹 準備できてへんねんて。  
姉 なんの準備やねん。  
妹 だから、すべてを受け入れる、準備。おねえちゃんの全部を。  
姉 おお、  
妹 たったひとりの姉やからな。  
姉 (笑う)  
妹 そっちこそひいたやろ、今。

姉、キッチンから大きなバケツとろうそく、そうろく立てを持ってくる。  
バケツには水がたっぷり入っている。  
姉、バケツ、ろうそく、ろうそく立てを妹との間に置く。

姉 はい。  
妹 ほんまにビールなしでいいの。  
姉 いいよ。  
妹 あ、そう。  
姉 もう飲まなやつてられんーってなつたころにちよつと冷えてるよ。だって冷凍庫やる。  
妹 うん、  
姉 はじめよう。

姉、ろうそく立てにろうそくを立て、  
妹、ライターでろうそくに火をともし。  
姉、その火をじっと見ている。  
しばし間。

姉 さ、  
妹 はじめる？  
姉 うん。  
妹 よし。  
姉 うん。

姉妹、しばらく先を譲るように見つめ合うが、  
姉、段ボールの中に手を突っ込み、葉書を一枚出して、

姉 「お元気ですか。九月になりました。近所を散歩していたらケイトウを見つけました。ケイトウはにわとりの頭と書きます。にわとりという字は学校で習いましたか。ケイトウは見たことありますか。名前どおり、とさかにそっくりの見た目をしていませう。ボクは花の中でケイトウが一番好きです。あの毒々しい赤を見るとぞくぞくします。毒々しいって意味は知ってる？あれは普通の植物とちよつとちがいますよね。あれは動物の色だ。血が流れてる。だからどこかでケイトウを見つけても、引っっこ抜いたらだめだからね。ケイトウをつかんだその手が真っ赤に染まりますよ。一番好きな花はなんですか。」

姉、読み終わると、葉書をろうそくに近づけて燃やし、  
持つていられなくなるまで火がまわると、バケツに投げ  
入れる。

妹、段ボールの中に手を突っ込み、葉書を一枚出して、  
姉 「お元気ですか。六月です。梅雨です。なんにもする気が起  
こりません。今ボクは寝っ転がってこれを書いています。なに  
もしてないので書くことはありません。今この体勢のまま見え  
ているものを順に書きます。くつ下、テッシュの箱、空き缶、  
かっこ、灰皿のかわりにしています、かっこことじ、爪切り、た  
ばこ、空のコップ。あと、ここにはたたくさんのDVDがありま

す。でもアニメじゃないよ。可愛いキャラクターは出てきませ  
ん。可愛いお姉さんが出てきます。どういうおはなしかは、も  
うすこし大人になってから教えてあげる」

妹、読み終わると、葉書をろうそくに近づけて燃やし、  
持つていられなくなるまで火がまわると、バケツに投げ  
入れる。

姉、段ボールの中に手を突っ込み、葉書を一枚出して、  
姉 「二月です。悲しいことがありました。一昨日の夜からやっ

ていたゲームが壊れてしまいました。ボクが壊したからです。  
ゲームって、やっぱり機械だから人間より阿呆です。いつもは  
普通だけど、たまにびつくりするほど阿呆なことになります。  
それでお仕置きをしたら、画面が真っ暗になりました。あつけ  
ないもんです。やはり、いわゆるは機械です。ゲームは」

妹 （葉書をのぞき込んで）しよせん、  
姉 え。ああ、「やはり、所詮は機械です。ゲームは目が悪くなる  
ので、はたちを超えるまでやったらだめですよ。ボクは五歳の  
ころからやったので、頭が悪くなりました。」

姉、葉書を燃やす。

妹 「お元気ですか。夏休みの宿題は終わりましたか。ボクは今  
日もノルマが終わらなくて、先生に叱られました。先生ってい  
つても、学校の先生じゃないよ。ノルマって分かりますか。ボ  
ク達には毎日ノルマがあります。先月嫌になって、一日なんに  
もしなかつたら、ひとりだけの部屋で反省させられました。ひ  
とりぼつちはさみしい。」

妹、葉書を燃やす。

姉 「ハッピーニューイヤー。こないだ仲間から、ハッピーの前

に、ア、をつけなくてはだめだと言われました。ハッピーの前に、ア。そんな間抜けなこと、ボクできません。」

姉、葉書を燃やす。

妹 「お元気ですか。六月になりました。じめじめして洗濯物が乾きません。ボクが今住んでいるアパートの近く小学校は、なぜか六月に運動会をします。変ですよ。体育の日は十月ですよ。子供たちは紅白帽子を被って走り回っています。ボクはちまきしてたなあ。女子はブルマでした。あなたが、小学生だったころ、ボクと、」

妹、あとが続かない。

姉、気にせず、葉書を一枚取り出して読む。

姉 「お元気ですか。この四月で、今の会社に勤めて十年になります。びっくり。月日の経つのは早いですね。所長さんから記念品をもらいました。なんと電波時計。電波時計、使ったことがありますか。時間を合わせるために、針が勝手にぐるぐる回ることがあります。それを見ていると、すごく安心します。ぐるぐるパーはボクだけじゃない。」

姉、葉書を燃やし、さらに一枚を取り出して、

姉 「お元気ですか。こっちは昨日雪が降りました。雪だるまは、」

妹 ちよっと。

姉 え、

妹 ちよっと、ごめん、タンマ。

姉 ああ、

妹 ごめん。

姉 朝になるで。さくさく進めな。

妹 分かってるけど、

姉、手に持っている葉書の続きを黙読し、燃やす。

姉 休憩していいよ。

妹 うん、

姉 「お元気ですか。ボクは昨日から絶好調です。なぜなら、」

妹 ビール見てくる。

姉 まだやる。

妹、キッチンの方へ行く。  
姉、大きな声になって、

姉 「なぜなら、久しぶりにお出かけしたからです。お姉さんたちはみんな優しい。ピストンピストンピストンピストンピストン」

妹、戻ってきて、部屋の入り口あたりで姉を見ている。

姉 まだやったやる、

妹 うん、

姉 さすがに。

妹 もとが常温やったしな。

姉 ああ、(と笑いながら葉書を選んでいる)

妹 やっぱ朝になるよ、これ、この量。

姉 だからさくさくやるうって。

姉、葉書を一枚読んで、読み終わると燃やす、をくり返している。

妹 全部読むのは無理がある、

姉 かもなあ。

妹 と思う。

姉 うん。

妹 一気にかつといこうよ。

姉 がっ?

妹 がーっと。

姉 だからそれ屋内では無理やって。火事なる、火事。

妹 そう、やねんけど。

姉 だから、あんた休憩してていいよって。

妹 うん。

姉 「お元気ですか。桜が散りました。嬉しいです。毛虫の季節。桜で浮かれてた阿保どもの頭の上に降りますように、毛虫」

姉、葉書を燃やす。

妹、段ボールから葉書を取り出し、読まずに燃やす。

姉 「あけましておめでトン。だけど今年はずた年じゃありませんよ。悪しからず。」

妹、黙々と葉書を燃やす。

姉 「お元気ですか。昨日は会いにきてくれてありがとうございます。夢の中でボクたちは踊っていました。ワルツです。あなたの、」

姉、読めなくなり、

姉 もう飲も。

妹 え、

姉 多少ぬるくてもいいわ。

妹 うん。

妹、キッチンからビールを持ってきて、姉に一本手渡し、もう一本は自分であける。

姉、飲みながら葉書を燃やす。

妹 やっぱぬるいとおいしさ半減やな。

姉 常温で飲む国もあんねんで。

妹 ふうん、

姉 あんたも手は動かしてや。

妹 休憩していいんじゃないの。

姉 休憩中でも手は動かすの。

妹 なにそれ。

姉、ビールを飲みながら、ときどき思い出したように葉書を燃やす。

しばし間。

妹 綺麗やったなあ。

姉 え、おねえちゃんとか。新しい家。

妹 ああ。

姉 広い、明るい、ほんで綺麗。めっちゃいいやん。

妹 去年できたばかりやからな。

姉 ああ、壁真つ白やったなあ。

妹 あんなもんあつというまに黄ばむわ。

姉 すぐそんな言う。

妹 あのひとも、これ(たばこを吸う仕草)。

姉 そうやっけ。

妹 家じゅうヤニだらけなるねん、どうせ。あつというまに。

姉 ルールつくつたらいいやん。ベランダでしか吸わない、とか。

妹 守ってくれるかな。

姉 守らすねんで。

妹 でもあの人が金多く出してるしなあ。

姉 おねえちゃん、

妹 うん、

姉 幸せになつてな。

姉 どのタイミングで言うねん。  
妹 いや、なんか、  
姉 こんなことしながら。  
妹 うん、  
姉 びっくりするわ。  
妹 幸せにならなあかんで。  
姉 あかんの？ ならな。  
妹 そう。  
姉 荷が重い。  
妹 へたれ。  
姉 うるさい。  
妹 この世にうまれてきたからにはなあ、幸せにならなあかん  
姉 ねん、みんな。生きるってそういうことやろ。  
妹 なにそれしんどいわ。  
姉 へたれへたれ。  
妹 うるさい。  
姉 でも真面目そうやもんな、お義兄さん。  
妹 うん。  
姉 優しそうやし。  
妹 かるたでな、  
姉 え、  
妹 かるたで、誠実って札があったら、たぶんあの人の顔描いて  
姉 あると思う。  
妹 なにそれ。  
姉 それくらい誠実。まごころの人。  
妹 ふうん、  
姉 うん。  
妹 じゃあ大丈夫か。  
姉 でもなー、あたしびっくりしてる。  
妹 なんて。  
姉 自分が結婚なんかしようとしてるから。  
妹 今さら。

姉 知ってる？ ポーはな、  
妹 ポー？  
姉 エドガー、  
妹 アラン？  
姉 ポーは、結婚してから死ぬまで恐怖小説書き続けてんで。  
妹 なにそれ。  
姉 そのくらい人生に影響を与えるってこと。善かれ悪しかれ。  
妹 ふうん。  
姉 自分は絶対しないと思ってたのに。分かんもんやな。  
妹 あたしは結婚よりも、あっちの方がびっくりしたけど。  
姉 どっち。  
妹 別れたの。前の、ほら、  
姉 ああ。  
妹 だって高校、中学か、のころからずっとやろ。  
姉 まあね。  
妹 そんなん別れられるもん。  
姉 いろいろあんの。  
妹 ふうん。  
姉 なにそれ、なんの顔。  
妹 べつに。  
姉 あいつはなあ、  
妹 うん。  
姉 あいつはなんか近いの。だから一生一緒にはおられん。残り  
妹 の人生あいつとずっと一緒なんて絶対無理。  
姉 なにそれ。  
妹 いきものとして近いんやと思う、あたしら。あるやん、霊長  
姉 目、とか、ヒト科、とか。そういうところで近いの。だからな、  
妹 たまに一緒に景色見てしまうときがある。  
姉 あたしも霊長目ヒト科の哺乳類ですけど。  
妹 だってあんたはちっちゃかったもん。  
姉 え、  
妹 ちっちゃかったやろ、あんた。



妹 一つの話。  
姉 あたしが、アスファルトに転がった蟬の死骸見るとき、そのアスファルトが日の光で真っ白に見えたとき、紙石齷なくなることが、なぜか息できひんくらい悲しかったとき。  
妹 だからそれいっよ。  
姉 あんたまだ全然、赤ちゃんみたいやったやん。  
姉 話とびすぎや、全然分からへん。  
姉 そういうな、あたしだけにしか見えてないと思ってたもんが、どうやらあいつには見えてるみたいいってこと。  
妹 うん、  
姉 ほんまのほんまはちがうもんなんやけどな。  
妹 ふうん、  
姉 うん。  
姉 いや、あんま分かってないけど。あんまっていうか全然。  
姉 あ、そう。  
妹 でも、  
姉 え。  
妹 ええなあ。  
姉 なにが、  
妹 ビール半分で酔えて。  
姉 酔ってへんわ。  
妹 ふうん。  
姉 なにそれ、なんの顔。  
妹 べつに  
姉 もう一本取ってこよ。あんたは？  
妹 まだいい。  
姉、キッチンの方へ行く。  
妹 おねえちゃんさー、  
姉 (声だけ) なにー。  
妹 今の話お義兄さんにしていい？

姉、戻ってきて、  
姉 うん。  
妹 え、  
姉 いいよ。  
妹 えー。  
姉 なによ。  
妹 いや、だつて、  
姉 だつて、なんやねん。今の話つてあいつのことやろ。  
妹 うん、  
姉 知ってるもん。  
妹 そうなん。  
姉 うん。  
妹 ふうん、そうなん。  
姉 なによ。  
妹 元彼引きずってる女のひとお嫁さんにしちゃうわけね、お義兄さん。なんかお気の毒やな。  
姉 べつに引きずってるっていうか、  
妹 ほんで子どもまでこさえちゃうわけね。  
姉 (ふっと黙る)  
妹 いっ言うん？  
姉 え、  
妹 おとうさんとおかあさんに。  
姉 ああ、  
妹 だつてもう確定やろ、とつくに。  
姉 まあ、  
妹 もしかしてまだ迷ってる？  
姉 いや、もうそれはないけど。  
妹 ふうん。  
姉 うん、  
妹 おねえちゃんがおかあさん、かあ。

姉 になれるんかな。  
妹 になれるわ。  
姉 荷が重い。  
妹 なあ、  
姉 なに。  
妹 その子、ナニ目ナニ科のナニ類やろうな。  
姉 ろうそくの火が揺れる。  
妹 しばし間。  
姉 ビールの缶を持って座っている。  
妹 缶に口をつけるが、飲んでる様子はない。  
姉 葉書を二、三枚段ボールから出し、読まずにろうそくに近づけて、端が焦げるやいなやすぐさまバケツに捨てる。  
妹 姉、しばらくそれをくり返す。  
姉 それをぼんやりと見ている。  
姉 昔さあ、  
妹 え、  
姉 昔こんな遊びせえへんかったっけ。  
妹 火遊び？  
姉 いや、火は使ってなかったと思うけど。ほら、おぼえてない？  
妹 えー、  
姉 あーあれあんたとじゃなかったんかなあ。  
妹 あたし記憶にない。  
姉 じゃああれか、おねえさんと一緒に遊んでたころか。  
妹 誰それおねえさんって。  
姉 ほら、あの銭湯のそばの家の、  
妹 あそこの家子どもなんかおったっけ。  
姉 あそこ昔はべつのひとが住んでてんで。あたしよりちよっと  
妹 年上の女の子がおってん。  
姉 へえ。

姉 結構遊んでもらった気がする。  
妹 そうなんや。え、で、  
姉 え、  
妹 いや急になんの話かと思って。  
姉 ああ、あんたがあまりにも真剣に燃やしてるから。  
妹 うん。  
姉 なんかかしらんけどそのときのこと思い出してん。  
妹 そりやあなあ、  
姉 うん、  
妹 だってこの量やで。そりや真剣にもなるわ。  
姉 そうやな。  
妹 一つの話、それ。  
姉 え、  
妹 そのおねえさんと遊んでたのって。  
姉 だいぶちっちゃいころやで、たしか、  
妹 事件の後？ 前？  
姉 (こたえない)  
妹 いや。ごめん。  
姉 えーどっちゃやったかなあ。  
妹 あたしさあ、  
姉 うん、  
妹 あたし、すきでちっちゃかったんじゃない。  
姉 え。  
妹 あのころ、望んで赤んぼやったわけじゃないよ。  
姉 いや、赤んぼよりはもうすこし大きくなってたで。  
妹 あたしやったら、あたしがいたら、助けられた、かもしれな  
姉 い、とか、  
妹 思ってたの。  
姉 いやどうやろう、  
妹 なんやねん。  
姉 でも夢はみる。  
妹 なんの。

妹 おねえちゃんの。  
姉 へえ。

妹 小学生のころのおねえちゃん。見たことないはずなのに。  
姉 見たことはあるやろ。

妹 からだとほぼおなじくらいのでっかいランドセル背負ったおねえちゃんが、ひとりりで歩いている。おねえちゃんひとりりで道草してる。

姉 なに、その夢あんたは出てけえへんの。

妹 うん。いや、あたしもいるよ。いるけど出てはけえへん。

姉 なにそれ。

妹 あたしは見てる。出てけえへんけど。ほんで、あーあたしがおつたらなあ、って思うねん。でも思ってるだけ。

姉 へえ。

妹 あたしがおつたら。おねえちゃんとおなじ小学生のあたしがおつたら、早く帰ろうって言うのにな。おかあさん待ってる

からって。あたし言うのにな。言ったのにな。

姉 うん、

妹 あたしがおつたら、なににかえてもあたしがおねえちゃんを守るのにな。あんな、精薄のきちがいの、ストーカーの、

姉 (こたえない)

妹 何年も何十年もおねえちゃんにつきまとう、あのうすのろの後ろ髪ひつつかんで、ひきずりまわして、地獄の底に、おでこ

からばーんって叩きつけるのにな。

姉 (こたえない)

妹 でもその夢にあたしは出てこない。

姉 うん、

妹 あたしは、出てこない。

しばし間。

姉、段ボールを探って葉書を一枚出し、

姉 「お元気ですか。寒い日が続きますが、風邪などひいてませ

んか。ボクの友達はこのないだインフルエンザになりました。」  
妹 おねえちゃん、

姉 「何日か高熱で唸ってました。そしてその友達が治ったと思つたら、またべつの友達がインフルエンザになりました。」

妹 赤ちゃんのこと、早くおとうさんとおかあさんに言ったら。

姉 「それで、ボクとさらにもうひとりの友達は怯えています。次はお前の番だと言っています。」

妹 喜ぶよ、ふたりとも。

姉 「お友達、いますか。ずいぶん前に、あなたがお友達と遊んでるのを見かけたことがあります。」

妹 みんなおねえちゃんの幸せを願ってるねんで。

姉 「可愛かったなあ。ボクも仲間に入りたかった。」

妹 幸せっていうと陳腐やけどさ、

姉 「あなたとあの子とボクの三人で遊ぶの。きつと楽しかったはずですよ。三人っていい人数ですよ。」

妹 もつとこう、あつたかい、ふくふくの、つるつるの、

姉 「ボクとボクの友達は四人グループなので、じっくりきませ

ん。友達は奇数に限る。」

妹 そういうところにおねえちゃんはいけると思う、ちゃんと。

姉 「奇数って分かりますか。二でつたらあまりができるのが奇数ですよ。」

妹 なあ、

姉 なに。つるつるって。

妹 いや。ちよつと言葉が思い浮かばへんかったから。

姉、妹、すこし笑う。

姉、読み終えた葉書を燃やす。

妹、燃える葉書をじつと見ている。

妹 手まで燃えるで。

姉 まだまだあるなあ。

妹 うん。まだまたある。

姉 読まんと燃やそうかな、やつぱ。  
妹 うん。  
姉 なにその顔、  
妹 べつに。  
姉 (葉書を一枚手にして) 字が汚い。  
妹 (姉の手もとをのぞき込んで) 汚いっていうより下手やねん、  
姉 これは。  
姉 漢字書かれへんのかな。  
妹 そうなんちがう。  
姉 それともあたしが読まれへんと思ってるのかな。  
妹 さあ。  
姉 あたしのこと小学生やと思ってるのかな。  
妹 知らんよ。  
姉 小学生のあたしにむけて書いてんのかな。  
妹 知らんって。  
姉 あたしとづくに大人やねんけどな。残念ながら。  
妹 そうやな。  
姉 一生懸命やんなあ。  
妹 (こたえない)  
姉 めっちゃ一生懸命に、書いてるよな、これ。  
妹 (こたえない)  
姉 書いてるとき、便箋のむこうにあたしが見えるんかな。  
妹 (こたえない)  
姉 でも残念ながら、あたしはもう小学生じゃない。  
妹 うん、  
姉 小学生だったあたしはもういない。  
妹 そうやね。  
姉 うん。いいや、もう。  
妹 え、  
姉 このまま段ボールごとごみに出そう。  
妹 ほんまに、  
姉 うん。

姉 そつか。  
姉 ありがとう。つき合ってくれて。  
妹 うん。  
姉 妹、ろうそくの火を消そうとするが、  
妹 姉がその火を見ているのに気づき、  
姉 おとうさんな、  
妹 うん、  
姉 今おねえちゃんとお義兄さんにおそろいの湯のみ作ってんね  
妹 んで。  
姉 あ、陶芸教室？  
妹 そう。最初マグカップにしようとしてんけど、持ち手のとこ  
姉 ろ難しくてやめてんて。  
妹 (笑う)  
姉 披露宴のときプレゼントするらしい。サプライズ。  
妹 じゃあ言ったらあかんやん。  
姉 ちゃんとびつくりしたげてや。  
妹 なにそれ。  
姉 今ならもう一個増やせる。  
妹 (こたえない)  
姉 なあ、今ならまだ増やせるよ。  
姉 湯のみやろ。作ってもらっても、使えるようになるの何年も  
妹 先やん。  
姉 そうやけど。  
妹 (笑い出して) でもおとうさん、  
妹 なに。  
姉 めっちゃあたしのことすきやん。  
妹 そうやで。なにを今さら。  
姉 だって手作りの湯のみって。  
妹 自分が丹精込めたもんあげたいねん、おねえちゃんに。  
姉 深いなあ。

姉 愛が。  
妹 (笑って) そうやな。  
姉 あたしなあ、  
妹 うん。  
姉 たまに潜るねん、  
妹 え。  
姉 おとうさんやおかあさんの深い愛に。  
妹 なにそれ。  
姉 どれだけ深いんか、知りたいから。  
妹 どれくらい深いの。  
姉 なんと、これが、  
妹 うん。  
姉 果てがない。  
妹 そうやろうなあ。  
姉 深いところで、じつと、その先を見るんやけど、  
妹 うん。  
姉 見えなくて。見えるようで見えなくて、  
妹 うん、  
姉 でもどうせ見えな思っ目をとじてしまったら、せつかく  
潜った分が台無しになつて、自分のことだけが見えるねん。  
妹 なんの話。  
姉 目はとじたらあかんつて話。  
妹 全然分からん。  
姉 騙されるよつてこと。  
妹 誰に、  
姉 かつて見たものに。それは今日の前にはないのに。  
姉、ろうそくの火を見てる。  
妹、ろうそくの火を見る姉を見ている。  
しばし間。

姉 知ってた？  
妹 え。  
姉 妊婦つて火見たらあかんねんで。  
妹 迷信やろ。  
姉 おなかに赤ちゃんおるときに火事見たらあざのある子がうま  
れるねんで。  
妹 そんな迷信やつて。  
姉 あざやで、あざ。  
妹 ほんで火事じゃないし、これ。  
姉 女の子のになあ、  
妹 え。  
姉 顔にあざあったらちよつとかわいそうやな。  
妹 女の子なん、  
姉 さあ。  
妹 さあつて。  
姉 まだ分かるわけないやん。  
妹 そう、やんなあ。  
姉 でも女の子。  
妹 え、  
姉 だつて、あたしの子やから。  
姉、ろうそく立てから、ろうそくを取り、  
姉 実験してみようか。  
妹 え、  
姉、壁の方へ行く。  
妹 ちよつと。  
姉 なあ、試してみたくない。  
妹 やめや。なに考えてんの。

姉、火のついたろうそくを壁に近づける。

妹 焦げるだけやって。灯油もまいてへんのに燃えるか。

姉 うん。

妹 てか、そういう問題じゃないし。

姉 うん。

妹 敷金戻らへんで。

姉 うん。

妹 てか、そういう問題でもないし。

姉、ろうそくの火を壁に移そうとし続ける。

妹 なあ、ちよつと、

姉 うん。

妹 ちよつと。頭おかしいんじゃない。

姉 あたしもな、

ろうそくの火が壁を焦がす。

妹 え。

姉 あたしもあれ迷信やと思う。

妹 うん、

姉 だつてこの子がいくらあたしからうまれたついても、お

妹 なじもんは見せられへん。

姉 べつのいきものやからな。

妹 そう。あたしが見てるのとおなじもんは、誰も見られへん。

妹、段ボールから葉書をひと掴み取り出し、  
それに火をつけ、

姉 妹  
え。どいて。

妹、壁目がけて投げる。

燃えた葉書は、畳の上に落ち、壁と畳をいたぶる。

そこには、らくがきの神様がいる。

そこには、埋葬されたもの達が眠っている。

火は広がらない。ぶすぶすとそこで小さく燻っている。

姉、妹、それをじつと見ている。

妹 見えるよ。あたしには、たぶんおなじもの、見えてる。

姉 そう。

妹 たぶんやけど、たぶん絶対。

姉 なに見える。

妹 おねえちゃん。

姉 あたし、

妹 からだとほぼおなじくらいでつかいランドセル背負ったおねえちゃん。

姉、妹、燃える壁をじつと見ている。

しかしそれは火ではない、煙でもない、葉書はもうその

かたちをとどめていない。

姉、妹、じつと見ている。

息を殺して。ただ立って。じつと、じーつと。

目はとじない。

潜るように、挑むように。

じつと、じーつと、ただ、目をこらす。

あたりは光に満ちていて、  
光の中で目をこらす。

終